

## 平成 28 年度 【 学園研究費助成金&lt;B&gt; 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ハナリ タカシ  
氏名 羽成 隆司

研究期間 平成 28 年度

研究課題名 他者との身体接触に対する抵抗感の検討

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	羽成隆司	文化情報学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究は、これまで申請者が行ってきた「対人的嫌悪感、接触回避」に関わる心理学的研究の一環である。本研究ではとくに対人的な身体接触への受容・回避傾向と「性的志向」との関連について分析する。身体接触の受容・回避の特徴を調べた我々の研究では、男性は接触対象の性に関わらず同程度の受容・回避を示すこと、一方、女性は、同性（女性）に対しては高い受容を、異性（男性）に対しては高い回避を示すことが明らかになっている。しかし、同性・異性という対象の分類は、主体の性的志向（異性愛者か同性愛者か両性愛者か無性愛者か）によって、その位置づけが変動する可能性がある。本研究は身体接触の受容・回避の特徴について、性的志向を考慮に入れた観点からより詳細に検討することを目的とする。

## 2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

調査対象者：大学生494名(女性 438名、男性 56名)を調査対象とした。平均年齢は、女性が18.96 歳(SD=1.09)、男性が19.97 歳(SD=0.91)であった。本学以外の共学他大学でも調査を行った。

調査方法：これまで用いてきたKawano, et al. (2011) の「接触回避尺度」、同性愛的傾向を測定する尺度（過去の同性との接触経験）、身体接触に対する回避を測定する尺度、性的指向を測定する項目を用いた質問紙調査を集団実施した。

結果の分析：各比率、各評定平均値について、性、および、性的志向の違いによって比較を行った。データ解析には、統計ソフトSPSSを使用した。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究で示された結果は下記の通りである。

女性の方が男性よりも、同性に対して恋愛感情を抱くことや軽度な性的身体接触が多かった。また、女性の方が男性よりも、自身が性的身体接触することに対する抵抗感や自分以外の同性・異性の他者同士が性的身体接触することについての抵抗感が小さかった。女性は肉体的関係などのような濃密な性的身体接触以外では、同性に対して受容的であることが示された。これまで我々が用いてきた接触回避尺度においても同様の特徴が確認された。すなわち、女性の男性に対する接触回避の程度が大きく、女性には受容的であり、一方、男性は相手の性による接触回避の程度の違いは小さかった。以上の傾向は、男性回答者、女性回答者全体から、異性愛者のみを抽出して比較した場合でも概ね同様であった。したがって、男性、女性いずれも異性愛者であっても、女性の方が同性（女性）に対して受容的であることが確認されたと言える。

ただし、本研究では男性回答者の確保が充分ではなかったため、以上の特徴をより明確にするためには、さらにデータの追加を行う必要がある。

なお、女性においては、一定程度のデータが確保され、性的志向（回答者自身の理解による）や同性との性的な接触経験の程度が明らかにできたことは重要な成果である。本研究では女性同性愛者はほとんど見られなかったが、両性愛者の割合は約8%、無性愛者は約3%であった。詳細に見れば、両性愛者と異性愛者の接触回避、接触抵抗感の評定値には差異が見られた。純粋な異性愛者でない女性は1割程度はいることとなり、本研究に限らず、性差を検討の対象にする研究においてはこの点を考慮する必要があるのではないかと思われる。この点を示唆するに至ったことも重要な成果の一つである。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①同性愛的傾向	②接触回避	③性的志向	④性差
⑤	⑥	⑦	⑧

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

今後の研究成果公開予定

次年度の文化情報学部紀要での公開を予定している。